敵の潜水艦を探す

萩原武雄　鹿沼市

●徴用され精銅所に

中学を出てから鉄工所で機械の仕事をしていたが、職人が足りないということで、徴用の募集があった。名前を徴用官に申告して、政府のお声がかりの職人になるわけだ。政府からの命令で現場に行って仕事をする、ということで、古河電工日光精銅所に行った。当時はずいぶん徴用でもっていかれた（自分のそれまでの生活を絶ち、国に尽くすためほぼ強制的に任地に向かうというような意味）。お国のためだからといわれ、誰も従うしかなかった。その頃は町工場や会社で、職人の取り合いになっていた。

●厳しい軍事訓練

当時、全国的な仕組みとして、尋常小学校を卒業して働く青少年のため、初等教育の補習のほか職業教育や軍事訓練をする青年学校というのがあった。18歳で仕事もし、青年学校にも入っていた。

青年学校での軍事訓練は厳しいものだった。銃の構え、弾倉の引き揚げ、命中率などを勉強したんだ。つまり覚えることは、人殺し。相手を倒すってことだ。

いろは坂を小銃を担いで駆け足で上がる。ロクなものを食べていないうえ、銃はかなりどっしりと重かった。とにかく人間扱いじゃない。まるで生きている動物だ。

昭和18年、青年学校の軍事訓練
中禅寺湖のほとりでの記念撮影。誰もが疲れ切った険しい表情だ

その頃、兵隊が南方に移動していた。日本に残っているのは、技術関係などの専門的な者だった。

●海軍に志願

その当時、海軍の錨のマークがかっこよく見え、若い人たちの憧れだった。北小学校に約400名くらい志願者が集まった。その中から20数名合格し、自分もその中に入った。試験は「烏合の衆とは何ぞや」などの言葉の意味や、海軍に入りたい動機とか、そんなことを質問されたと思う。

「命はどうするんだ」と聞かれ、当然、「国にささげるものだ」と答えた。時代の流れの中で、死を覚悟して志願したのだから、このほかに答えようのないものだった。「よろしい、決まった」それで横須賀の第二海兵団に行くことになった。

昭和18年、9月1日に入団するよう海兵隊から通知が来た。8月何日のことでまだ会社に行っていたから、9月1日というのは、これはたいへん忙しかった。

鹿沼の寺町のある床屋さんが、軍楽が好きだった。だれがいつ入団すると聞くと、のぼりを立てて、ぷかぷかどんどん省線（現在のJR鹿沼駅）の坂を上がって行く。9月の1日には17、18名の鹿沼出身者が出征した。見送りの人と駅までみんなで行って、そこで解散。私はそのまま横須賀にもっていかれた。

●海軍の生活

海軍に入ってからは横須賀市久里浜の海軍通信学校で勉強した。その頃、海軍で初めてテレビジョンというのを採用したので、それを約半年近く勉強した。新しい技術をお前たちが勉強して後輩に残せよ、という命令で夢中になって学んだ。そのおかげで命拾いというか、直接戦地に行くことはなかったことになる。

海軍ではこんな思い出がある。テーブルで20人くらい並んで食事をするが、たまに下士官の気に障るようなことがあると、「今日は飯なし！」とテーブルに敷いてある白い布をひっぱって、食事を全部床に落とすんだ。18、19歳の若者が夕食なし。夜はハンモックに寝るが、お腹がすいて泣いてるやつもいる。この頃、少し階級が偉くなっていた私は、見つかったら殺されるのを覚悟して、倉庫に忍び込んだ。篠竹を斜に切って、米袋に差し込み、生の米を靴下に詰めて持ち出した。一班14、15名に「音を立てないで静かに食べろ」と生の米を配った。

常に下士官はどんぶりに白米を食べているんだ。食べ残しを捨てている場所に、夜中に忍んで

行って、にぎり飯にし、みんなにそっと食べさせたりしたこともある。汚れたのは水で洗ってそれも食べた。

そういう思いをして軍隊をやってきた。清潔にしてないとか、よくそういうことで罰があった。ただ、暴力的ないじめのようなことは、海軍ではなかった。駆逐艦ではそういう野蛮なことはなく、家庭的だった。ところが陸軍は鼻血を出す、歯が折れるということになっても、すみませんって謝っている。死ぬ一歩手前までやられる世界で、私らとは全く話が合わない。駆逐艦では、親や兄貴の言うことを聞くような、そういう雰囲気の中で戦闘に加わった。お互いに助けあうのは当たり前のこと。しかし、何はともあれ、軍隊生活は地獄だ。

●青森へ

通信学校を卒業してから、南に行く者と北に行く者を上官が決めた。私は北を希望した。なかなか希望通りにはならないが、その頃は無線の資格を持っている人が少なかったからか、希望通り北の方面に行くことになった。ここが運命の分かれ道だった。南方に行った人はずいぶん戦死した。

一等水兵時代

東北に行くというとき、うちに連絡できないか考えたが、管制があってできなかった。ちょうど宇都宮の駅で大谷石を加工しているおじさんがいた。電報を打ってくれないかと頼んだ。「われ北へ行く　武雄」これだけ。終戦後帰ってきてから、「電報を受け取ったかい？」と聞くと「わけのわからない内容だった」とのことだったので、見ず知らずのおじさんが電報を打ってくれていたことがわかった。

昭和19年の3月、青森の大湊（おおみなと）という軍港に着いた。

大湊から少し奥に釜臥山（かまぶせやま：879㍍、下北半島で最も標高が高い）の頂上に見張り所があった。麓からそこまでの道中が長いが、当時10人ぐらいいた部下が角材を担いでその坂道を上がった。見張り所に電波探信儀を取り付けた。

秋は雑木山なのできれいだった。きのこが採れ、地元の人がリュックを背負ってやってきた。キノコの食べ方を教わったりした。

昭和19年5月
通信学校の卒業記念（152分隊第1班）

通信学校を出たころ（20歳）
リーダーだった。入団当時より自信にあふれた顔つきだ

その見張り所のあった所を家族に見せたいと思い、この5月の連休に家族で行ってみた。雪があって途中までしか行けず、頂上に行きつけなかったのが残念だった。（現在、頂上は自衛隊のレーダーサイトになっている）

●駆逐艦で日本海を見守る

昭和19年9月15日から20年8月15日まで駆逐艦「柿」に乗っていた。第11水雷戦隊と言っていた。艦長は浜口大佐。船底に近い一番下は機関兵、その上の階にいた。日本海を防備する役割だった。

ブラウン管の画面上に青い線が入り電波探信儀が敵の電波をキャッチする。そういう敵の潜水艦を探す役割だった。相手にもこちらの居場所がわかってしまうから、電波を発信しているだけじゃダメで、何度も位置を変えて逃げながら探索した。

敵と戦い合ったことは一度もない。ただ、わけのわからないところから弾が飛んでくるときは、向こうから捕捉されているから逃げるしかない。こちらから発射したりはせず、逃げるだけ。魚雷は積んであるが、相手の潜水艦を狙ってドカーンと海の中に落とすと、当たれば破裂するが、同時にこちらの船もやられてしまうことになる。140～150名もの乗組員どうしの協力で敵を威嚇した。

普段はハンモックで寝るが、非常時は邪魔になる。きちんとたたんで縛って甲板に上がり、積み上げて、弾が飛んできても吹き飛ばないように並べて、ハンモックのロープで縛っていく。これを甲板にみなしばりつけて、「オーライ、戦闘、用意よし」という。大砲の玉が飛んできてもはじき返すことができるよう、棒のように固くした。

船にはずっと何日も乗り続けるということではなく、一日ごとに帰港した。

●終戦、そして新しい人生

舞鶴にいた時、終戦を迎えた。艦長が「これでもう終わりだから、帰っていい」と簡単な挨拶をしただけだった。舞鶴から電車で帰ってきた。

2年前の9月1日に今宮神社から出征した。日章旗に大勢の寄せ書きをもらい、それを胴に巻いて出征した。

日章旗に書かれた名前の人は、もう皆いなくなってしまった。「武運長久」、「縣社今宮神社」、「色あせて梢に残る花よりは散りて悔いなき花ぞ恋しき」などと書いてある。

そして9月1日に帰ってきた。宇都宮に着いたときは空襲でやられたのか、貨物ばかりで客車がなかったので、貨物列車に乗って鹿沼に帰ってきた。

終戦下士官といって終戦になってから下士官の称号をもらった。ご苦労様という意味合い。表情に余裕がある

終戦になった時の気持ちは、言い表すことが難しい。ついさっきまで命をかけていたのが、急に生きて帰れるということになったんだ。うちに帰れるのはありがたい。うちがあったし思い切ってうちに帰ってきたわけだから。その踏ん切りがつかなかったら、負けた腹いせに、どこかで浮浪児でもやってたかもしれない。

終戦で頭がパニックになった。嬉しいというより、どうしていいかわからない。嬉しいなんて気持ちはもっとゆとりができてからだ。最終的に考えて、ああ、俺は生きてるんだな、戦争はもうないんだな、その一言がすべてだ。おかげさまで、現在の私がある。

生きてるってことに対しても、自分が生き残ってしまった罪悪感があったり、明日からどう生きていったらいいかとか、なかなか現実に直面してみないとわからない。自分を立ち直らせるために何かに没頭したいと、私は好きな漢詩を勉強した。

日章旗と萩原氏
72年前、この日章旗を腹に巻いて出征した

よくぞここまで集めたなと思うくらいに、すべて漢詩を巻物で持っている。詩吟の上席師範という資格をとったりして漢詩に打ち込んできた。

●ある友達の思い出

この日章旗にある名前の友達はみんな死んだ。最後の一人（府所町）も少し前に亡くなった。彼は同じ志願で海軍だったが、私は9月で彼は6月に入隊。かつて通信学校の道路でばったり行き会ったことがある。向こうから、どうも見た顔がやってくると思ったら、彼だ。相手は、わずかだが先輩。お互い気持ちはわかったので、そのまま別れた。彼は最後はシベリアに送られた。

シベリアからの船が着いた舞鶴に、戦後しばらくして一緒に出かけたことがある。食べるものがなくて、塩のおつゆにパン半分ぐらいしかない食事の様子が人形で再現されているのを見て、彼は涙ぼろぼろに泣いた。シベリア抑留の歳月のさまざまが万感胸に迫って、堰を切ったのだろう。

〈二〇一六年7月お話を伺ってまとめました〉